



第132号



伊勢西来寺蔵 『観経曼陀羅(当麻曼陀羅)』

お盆に仏様の浄土を臨む



西来寺山主 寺井 良宣

お盆を迎えます。仏様を拝み、ご先祖を浄土からあたかも身近に迎える如く偲びます。中国で浄土教を確立し、恵心僧都の『往生要集』に幾度も引用される道綽禪師の『安楽集』のなかに、「先に往く者は後の者を導き、後の者は先の者を訪らう」という意味の言葉を見ます。先の者が導くとは、亡くなった身近な人が私達に仏の教えを以て語りかけてくることです。一つに、世は無常なのであなたも必ず死にますよ、だから今生きている意味をよく味わい、道を求めて命を全うして正しく生きて下さいねと。二つには無我の教えで、自己中心で私の強い私でもですが、人は決して一人では生きておらず、衆くの縁によって生かされているのですから、家族や周囲の人達と助け合い支え合って仲良く生活することが自分を幸せにしますよと。三つには涅槃の教えで、あなたも必ず浄土に生まれて阿弥陀仏の本願力によって仏に成らせてもらいなさい。仏に成るとは、苦の衆生の辺に寄り添って救済する弥陀の働きに参加することです。私共には阿弥陀様のような大きな能力は持てないとしても、少なくとも子や孫達、身近な方々を見守り心安らかな幸せを永遠に願い続ける役割がありますと。恵心僧都は、「我だにもまず極楽に生まれなば、知るも知らぬも皆迎えてん」と詠

い（古今和歌集）、僧都が浄土に生まれることを確信できた喜びをすべての人々に分ち与えたいと願っておられます。

つぎに、法華経には「法喜禅悦食」と説かれます。これはあたかも私達が食事を喜びとするように、浄土では教え（法）と念仏（禅）を食事として喜びとすること、つまり私達が経文を読み念仏を申すとき浄土が明るく輝き先祖達が栄養分を得て悦ぶことを意味します。お盆に限らず、彼岸や月忌や年忌に法要を営み、僧侶を招いて経文を読み念仏を称えて下さるのを聴聞して、お浄土の先祖を訪らうことも同じ趣旨です。とくにお盆では私達子孫が相集いご馳走を戴いて喜ぶ様をみて、ご先祖もまた悦びとする交歓があります。また、教えと念仏を心の食事とすることは、私達にとっても肝要な意味を教えます。お経を読み教えを聴聞し念仏を唱えることは、日常の生活と心をとても豊かにします。真盛上人は日々念仏申すことを勧め、十念を授けられました。一日の朝夕にわずかな十念が、仏様の智慧の光を家庭とわが心に招き入れ、優しい慈悲の心に包まれて、生活を尊く明るくします。そのような不断念仏をご開山真盛上人は勧められました。

(宗学研究所勧学)

人類はコロナウイルスと和解できるか

東北大学名誉教授 佐藤 弘夫

日本列島の東北地方には、「草木供養塔」という文字が刻まれた石碑が数多くみられます。この碑は、山で仕事をすする人々が切り倒した草木に感謝し、その霊を慰めるために立てたものでした。日本にはほかにも、「鰻塚」・「蝸供養碑」など、人以外の生き物を慰霊するためのたくさんのモニユメントがあります。供養の対象は、「針供養」や「人形供養」のように、命をもたない存在にまで及んでいるのです。

その背景にあるのは、この世界が人間だけでなく、神・仏・死者・動物・草木など、無数の存在によって構成されているという独自の世界観でした。人はこの世を構成する無数の要素の一つにすぎませんでした。人間だけが突出する生き方は周到に回避され、万物との調和が重視されたのです。

調和が理想とされたのは、現代人が邪悪とみなすものについても例外ではありませんでした。例えば、近年世界中がその流行に苦しめられたコロナウイルスです。

前近代の日本では、流行病をもたらすウイルスや菌は「疫神」・「疫病神」と呼ばれ、グロテスクな姿で描写されてきました。注目されるのは、いかに忌み嫌われようと、疫病神はどこまでも「神」だったことです。そのため、流行病を防ぐための対策は、疫病神を敵とみなして叩き潰すのではなく、手厚くもてなして、気持ちよくお帰りいただくという手段がとられることになったのです。

かつてこの地球上には、人以外のさまざまなものがわたしたちに語りかけてくる時代がありました。『日本書紀』の「草木ことごとくによくものい

う」という言葉が示すように、動物から草木、果ては疫病神までが、生き生きと活動して、わたしたちに向かって言葉が発しました。それはこの世界を、人が森羅万象と分かち合っているという感覚の共有にほかなりませんでした。人は万物を神として尊重しました。ときにそれらが暴走して、人に祟りや害をなすことがあっても、決して忌避できない同居者として共生する知恵を身につけていました。「草木供養塔」の

思想も、感染症をもたらすものたちを「神」として尊重する立場も、その源はそうした発想に根ざっていたのです。いま神がわたしたちに向かって言葉が発することはありません。草木も口を閉ざしてしまいました。その原因は、それらが人に語りかけることをやめたからではありません。人が万物の発するメッセージを聴きとる力を失ってしまった結果なのです。

それは、人間がこの世界の主役であるという近代的な世界観の台頭と密接に関わる現象でした。それはまた、人が一つの世界を他の無数のものたちと分かち合っているという感覚の喪失と、表裏をなす出来事でした。人類は地球における唯一の特権的存在と化し、その傍若無人の振る舞いを抑止するもの



はなにもなくなってしまうのです。

いま人間の生活が環境に与えた影響によって、世界各地で異常気象が相次いでいます。廃棄されたプラスチックによる汚染は、地球全体に広がっています。人はといえば、こうした地球規模の危機に力を合わせて対応するどころか、人種・宗教・国籍・信条を口実にした対立はますますエスカレートしていきます。この地球にとってもっとも危険な存在は、実は人類そのものなのです。国境を超えて協力し合わなければ、もはや人類は生存することはできません。人以外の無数の生物・無生物がいて、初めて人類も生き延びることができるようです。コロナウイルスの蔓延は、特権的な地位にあらををかき、地球上のすべての生物を滅亡の危機に晒している人類に対する、共棲者からの警告のサインと捉えることはできないでしょうか。

わたしたちはウイルスを不倶戴天の仇敵としてのみ捉えるのではなく、ときにはそれが発するメッセージに謙虚に耳を傾けてみることも必要です。天台仏教で説かれる〈一念三千〉や〈草木成仏〉の思想は、まさにその大切さを教えてくれるもののように、わたしには思われるのです。

〔添付の図〕疫病神の群れ「融通念仏縁起」
〔日本の絵巻〕中央公論新社 による

八回連載(その3)

『真盛上人一代記』

『御絵伝』と『和解伝』を中心に宗祖の行実を追体験

西願寺 長谷川 真徹

二、母との別れから越前到着まで

真盛上人が四十歳の時に、母(祐言尼)は往生されました。上人は菩提の志を益々強くされ、あくる年の文明十五年(一四八三)、叡山三千の宗徒との交わりを絶ち、別所といわれた黒谷の青龍寺に隠遁(いんとん)されました。そこで遍く仏典を読み込まれ導き出された答えは、『往生要集』の義に徹するという



ことです。以後四年間毎日六万遍の称名念仏を怠らず厳修したと云われています。

文明十八年(一四八六)正月、青龍寺の大黒天に向かつて千座念誦の法を厳修されていると「衣食は私がお世話しますから、早く世間に出て広く衆生を救いなさい」と、お告げがありました。



上人は人々のために教化をする時が来たと意を決し、坂本の生源寺(しんげんじ)に於いて七日間の説法会を開き『往生要集』について講説しました。その評判は、比叡山全域に知れ渡り、多くの高僧も聴聞に来られ、近隣の人々も縁を結び

たいと押し寄せました。これが上人が衆生を教化する最初となりました。

生源寺での説法の後、叡山からの使いが上人のもとを訪れ、「西教寺は、慈恵大師や恵心僧都(『往生要集』を著作編纂)が伽藍を整備されたと伝わる唯一無二の古霊場であります。また、元亨年間(一三二一〜一三二四)からは戒律を伝える寺ともなりました。しかし、近年は伽藍も教えも荒廃した状態です。ぜひ入山され復興してください」と懇願されました。上人は快く了承され、同年西教寺に入山されました。当時、上人は後土御門天皇の招きで何度も宮中に参内し『往生要集』や『法



華経』を進講されました。また、天皇をはじめ宮中の人々に御十念や円頓戒を授けています。

長享二年(一四八八)には、京都東山山荘に於いて將軍足利義政公に円頓戒を授けました。將軍は、益々上人を尊敬する思いが篤くなり、自らが施主となり京都の誓願寺に上人を招き七日間の説法会を開きました。將軍をはじめめとして貧富、老若男女関わらず多くの人々が聴聞に訪れ会場はあふれかえりました。

上人は四十六歳までは京都や江州を中心に教化されていましたが、同年信州善光寺へ参詣し、帰路を北陸路にとり越前に向かいました。八月には府中(現越前市)に到着され数日間越前に逗留し多くの人々に円頓戒を広め、念仏を勧められました。

(続く)



ご祈願のご案内
歓喜天(聖天)
大般若転読会祈願法要

西教寺の安養院聖天堂では、歓喜天(聖天さん)をお祀りしております。

秘仏歓喜天は、靈験あらたかな仏教守護神といわれております。あらゆる障害や困難を取り除き、福德をもたらす強力な天部の仏さまです。

西教寺では、毎年一月十六日・五月十六日・九月十六日に歓喜天御宝前におきまして、武田管長猊下御導師のもと、内局・寺務所職員が出仕して大般若転読会祈願法要をお勤めさせていただきました。皆さまの息災を祈願して、六百巻の「大般若経」が賑やかに「転読」されております。

また、同時に皆さまの各種ご祈願も受け付けております。

詳しくは左記をご参照ください。

祈願料(一祈願) 三千元
 祈願内容

- ・家内安全 ・商売繁盛
- ・病氣平癒 ・身体健康
- ・心願成就など

※こちらに掲載されていないご祈願も承ります。

ご参詣にお越しの場合
 日時

令和六年九月十六日 午前十一時

受付

午前十時～午前十一時
 法要終了後、祈願御札を授与し、食堂にてお食事をご用意しております。

郵送・振込によるお申込みも受け付けております。

郵送の場合

現金書留にて九月十三日までに必着でお送りください。(必ず祈願内容を明記ください)

お振込みの場合

左記の口座番号に九月十二日までにお振込みください。お振込用紙の備考欄に必ず氏名・住所・電話番号・祈願の内容を明記ください。

郵便局

振替口座

009600031636

本山西教寺 寺務所会計課

ご郵送・お振込みの方は、後日、ご祈願させていただきました御札をお送りさせていただきます。



**涼風鈴参道
 通り抜け開催**

令和三年よりコロナ禍に疫病退散祈願から始まりました「納涼風鈴参道通り抜け」が今年も開催されています。

去る六月二十二日に総本山西教寺貫首武田圓籠猊下御導師のもと、内局・寺務所職員に御出仕いただき、風鈴参道通り抜けるご参詣の皆さまの除災招福を祈願した法要を執り行いました。

今年も三千個の色とりどりのガラス風鈴を石階段より本堂前をはじめ境内のあらゆる場所に設置し吊るされています。

子どもたちに人気の風鈴絵付け体験や境内にたった一つだけ吊るされている金の風鈴を探していただくなどのイベントも開催しています。

今年も猛暑が予想されるなか、少しでも涼を感じに檀信徒の皆さま、是非総本山西教寺までお参りください。

風鈴参道通り抜けに關しまして詳細



は、西教寺のホームページをご参照ください。

本山納骨のご案内

～心のふるさと比叡山麓西教寺へ～

西教寺では、本宗菩提寺の檀信徒さまを対象に、亡きご精霊の納骨を受け付けております。

真盛上人ゆかりの比叡山麓、琵琶湖を望むお念仏の聖地で大切な方々が心やすらかになりますようご納骨のお申し込みをお待ちしております。

事前予約が必要となります。菩提寺もしくは本山へご相談ください。

納骨料 二万円(納骨堂にてご回向)

三万円(本堂・納骨堂にてご回向)

檀信徒の皆さまへお願い

総本山西教寺にご参拝の際は、先にご配布させていただきました「檀信徒用無料拝観券(ご家族五名様まで)」を必ず受付へご提示ください。紛失された方は、本紙(寶珠)をお持ちいただきご提示いただきますよう、お願い申し上げます。

発行所 天台真盛宗教学部

大津市坂本五丁目十三一

総本山西教寺内

電話 大津 (〇七七)五七八〇〇一三番代

印刷所 宮川印刷株式会社

大津市富士見台三十八

電話 (〇七七)五三三二二四一番